鹿大広報

No.152
Jan/2000

編集・発行
鹿児島大学
広報委員会

特集：2000年の門出

http://www.kagoshima-u.ac.jp/

目　次

■特集　　2000年の門出

2000年の門出を祝して…… 学　　長　田中　弘允 …… 3

卒業・修了にあたって …… 4

稲田　葉子（法文）　田中　逸朗（法文・院）　谷山　由佳（教育）
濱川　達一（教育・院）　重吉　亮一（理）　岩井田千穂美（理・院）
宗　　秀典（医）　室屋　真二（医・院）　永光　英之（歯）
大森　健一（歯・院）　前田　朋也（工）　木村　至伸（工・院）
木下　祐一（農）　大隈　浩美（農・院）　小薗　裕子（水産）
佐藤　保大（水産・院）　宇都沙智子（医短）　生田美和子（医短）
ムラト　イ‐ギト（水産・院）　ヌルル　タウフィック　ロッチャマン（工・院）

退官にあたって …… 9

井上　晃男（多島研）　大嵩　禮造（教育）　宮路　　廣（教育）
黒岩　忠義（教育）　佐竹　　巌（理）　山下　　智（理）
福田　健夫（医）　山元　篤朗（医）　井上勝一郎（歯）
松村　博久（工）　鎌田　薩男（工）　堀口　　毅（農）
石畑　清武（農）　東川　勢二（水産）　福永　　孝（医）
川井田清広（歯）　米森美智子（理）　原口　　典（教育）

■創立50周年記念式典学長式辞…… 14

■学内だより

○21世紀の鹿児島大学に新しいサークル棟を…補導協議会委員長・学生部長 …… 野　　勉 … 17
○随　　想 … 鹿児島顔談話会の発足…歯学部代表 …… 伊藤　学而 … 19
○保　　健 … 結核―その実状について―…保健管理センター所長 … 前田　芳夫 … 20
○留学生日記 … 留学生から見たグローバリゼーション ……ノルミザン・バカル … 21
留学する理由 …… ミエン　トウェー … 21
○研究室紹介 … 固体電子論グループ…理学部物理科学科 … 石田　尚治 … 22
○サークル紹介 華道部・馬術部 …… 23
○新任教官紹介 …… 24
○図書館だより …… 26
○編集後記 …… 26

表紙デザイン

「たなびく桜島の噴煙を突き抜けて登る太陽と光で2000年の門出を表現した」

教育学部 教授 美術教育講座　梅田　晴郎

特　集

2000年の門出

2000年の門出を祝して

学　長　　田　中　弘　允

卒業生の皆様、鹿大での学業を見事に達成され、ここにめでたく卒業されますことを心からお祝い申し上げます。

皆様は、50年の歴史と伝統のある本学で、豊かな人間性と幅広い教養、専門職業人としての知識・技術、研究者としての素養を積まれました。その内容はもちろん個人によって異なるものであります。この節目に当たり、自らの力を充分認識し、それを誇りにしてもらいたいと思います。

明日から皆様が参加する社会は今大きな激動の只中にあります。20世紀の激動から21世紀の激動にもまれる時代です。アルビン・トフラーによりますと、この社会の激動は、文明の３つの波のぶつかり合いによって生じたものであります。第１の波は農業分野、第２の波は産業革命によって生じた波でありますが、第３のそれは、20世紀後半に起こり始めた情報革命の波であり、知識・頭脳がその生産資源であるという特徴をもっています。もちろん、農業、工業、情報といった３つの分野は存在し続けますが、今後は第３の波が全体を統合するとされています。

おそらく社会の変化はより速くより広範にそして新しい枠組において進行するでしょう。予測は極めて難しく、先行き不透明であり、皆さんは不安を感じておられることと思います。

ここで大切なことは、自分自身のアイデンティティをきちんと確立することであると思います。そうすれば、どのような変動に対してもしっかりした軸足で立ち、それを基にして思索し、行動を起こすことができます。そして、今までに蓄えてきた実力を思う存分に発揮してもらいたいと思います。そして、自己実現を目指してください。21世紀社会はあらゆる可能性をもっており、行動を起こせば何らかの成果をあげることができると思います。皆さんには、また、社会の一員として、社会のあり方を考え、望ましい姿へと変えていくために行動して欲しいと思います。全世界は第３の波によりグローバル化し、世界中が、少なくとも経済活動の領域においては、アングロアメリカン・スタンダードによって支配されようとしています。すべてが市場原理によって統合され、強い者の１人勝ちの世界となりつつあります。日本は本来の文化をもち社会体制も独自のものを育ててきました。その日本に一律にこのような論理を持ち込んでよいのか、あるいは日本型資本主義といった社会システムの構築はできないのかなどの大きな問題に是非目を向けてもらいたいと思います。また、これからの民主主義を推進させるために、社会的課題を深く考え、勇気をもって発言し実行することは重要であります。更には、地球的課題にも充分な思索と実行を期待します。

21世紀社会は皆様の社会であります。よりよい社会づくりを目指して下さい。

このたび退官される教職員の皆様、大変困難な時代に無事務めを果たされましたことを心からお喜び申し上げます。

御存知のとおり本学は昭和24年に創立され今年は51年目にあたります。この間大学紛争など多くの困難がありましたが、これを乗り越えて、全国有数の総合大学となっています。現在では８学部８大学院研究科、附属図書館、地域共同研究センター、総合情報処理センター、多島圏研究センター、アイソトープ総合センターなどの全学附属施設などをもっています。卒業生は学部学生59,365名、大学院生5,372名、合計64,737名に達しています。この中には1,440名の外国人留学生も含まれています。卒業生は世界中至る所で様々な分野で活躍しており、また、鹿児島の各分野で指導的役割を果たしています。特に産学官連携や全学合同プロジェクトなどの発展は、地域社会から高い評価を受けています。また、最先端の研究や地域に密着したきめ細かい研究も数多くなされ、豊富な成果は人類の知の創造に寄与しました。これらの成果は皆様の御努力によるものであり、本学を代表して心からお礼申し上げます。

20世紀も終わりに近づいた今、激動は全世界を覆い、大学にも国立大学独立行政法人化を含む大きな波が押し寄せています。私どもは、高等教育・研究に直接携わり一定の成果をあげてきた者として、これらの課題の本質を探り、あるべき姿を明確にし、それを国民的議論の場に上げることを主張し続けなければならないと考えます。すでに大きな実績をあげられた皆様には、今後とも社会にあって御指導、御協力をくださいますようお願い申し上げます。

皆様方は、明日から新しい生活に入られることと存じます。心身ともに健やかに、すばらしい人生を送られんことを心からお祈り申し上げます。

特　集

卒業・修了にあたって

稲　田　葉　子

■思うこと

2000年は静かに訪れました。このnew milenniumの幕開けの瞬間を充実した気持ちで迎えられたことを幸せに感じています。

振り返ってみると、これまで自分にとって何度かの節目があり、その時々に大いに悩みもしましたが、友人や家族に支えられて乗り越えてきたような気がします。この4年間の大学生活では興味ある分野を自由に学ぶという有意義な時間を過ごすことができました。多くの人との出会いは刺激となり自分をとても成長させてくれました。自分を深く見詰め直すことを繰り返す中で、他人を思いやることは自分をも成長させることだと知りました。

4月からは人に教える立場に立つことになりますが、好奇心を忘れず貪欲に多くの物事を学んでいく姿勢を持ち続けながら、これまでの経験を生かして生徒をサポートしていきたいと思います。自分だけの価値観に捉われず広い心を持ってどんな事でも受け入れていく努力を続けていきたいと思います。最後に、今まで支えてくれた家族や友人、先生方に感謝の気持ちを込めて…Thanks!!

（法文学部人文学科　**稲田　葉子**）

田　中　逸　朗

■大学院生活を終えるにあたって

早いもので、鹿児島大学大学院での2年間ももうすぐ終わりを告げようとしています。十数年前に謳歌した楽しい学園生活の再来とばかりに入学前に抱いていた甘い期待は、講義が始まるといとも簡単に打ち破られました。鹿児島市職員として業務をこなしながら、学問にも取り組む生活は、実際多忙ではありましたが、それ故非常に濃密なものでした。

いささか錆びついていた脳細胞の再活性化には、やはり多大なる困難が待ち構えていました。しかし、社会人としてこれまでに得られた様々な経験が、鹿児島をもっと住みよいまちにしたいという使命感が、そして先生方はじめ皆様のお力添えが、私の大きな後ろ盾となりました。

こうして大学院で研修できたことを、心から感謝しています。2000年、私は市の職員として業務に専念することになりますが、私たちの郷土である鹿児島の「まちづくり」に、ここで学んだことを活用してまいりたいと思っています。

（法文学部人文社会科学研究科　**田中　逸朗**）

谷　山　由　佳

■新しい門出を迎えて

私の大学生活は、多くの人々に出会い、様々な経験をすることができ、とても充実した有意義な四年間だった。

中でも、特に思い出深いのは、教育実習である。私は、三年の時、小学校に、四年の時、中学校に行ったが、どちらも子供たちと別れるのがとても辛かった。この実習を通して、私は、教師には教材研究や指導方法など、絶え間ない研究や修養が必要で、それがいかに大変かということも良く分かったが、それ以上に、これからの未来を担う子供たちと触れ合い、その子たちが伸びてゆくための手助けができる素晴らしさを感じることができた。

これから私は教師という道を歩み始める。様々な困難にぶつかることも多いだろう。けれど、私はこの大学生活で学んだ多くのこと、得たことを生かし、その困難を乗り越えていけるようにしたい。そのために、今という時を大切にし、一生、学び続ける姿勢を持ち続けたい。

（教育学部小学校教員養成課程　国語科選修　**谷山　由佳**）

濱　川　達　一

■修了を迎えて

私が鹿児島大学に入学して早いもので6年という時間が経過した。これまでの6年間を振り返ってみると様々な出会いや転機があったように思う。一番の転機はやはり彫刻との出会いであろう。彫刻というものに初めて向かい合った時のことは今でも鮮明に覚えている。今までデッサンや平面的な制作ばかりやってきていた私にとって3次元しかも表現素材そのものに直接触れて制作する彫塑は大きな衝撃であった。その衝撃に比例して面白さも難しさも実感していった事を覚えている。そして、池川先生をはじめ研究室の仲間との出会い。彫刻の右も左も分からない私に熱心にご指導くださった先生、彫刻という同じ志を持った仲間。これらの思い出は私のかけがえのない財産であり、大きな力である。

私は春から教師という新しい道を進み始めるが不思議と不安はない。それは私に恩師、仲間そして彫刻があるからであろう。大学こそが私にとって人生の転機であったのだろう。

（教育学研究科教科教育専攻　美術教育専修　**濱川　達一**）

特　集

重　吉　亮　一

■卒業にあたって

私が鹿児島大学に入学して、４年という月日が経とうとしています。この４年間で、私が最も大切だと感じたのは、人との出会いです。友人や先生方、留学生、学術調査で行った海外の人々など、さまざまな人とのたくさんの出会いがありました。そのような出会いの中では、自分の考えをぶつけあうことで、よりお互いのことが分かっていくということを知ることができました。先生方からは、講義や実験を通じて、研究することや研究を続けることの楽しさや大変さを教わりました。また、海外の人々との会話では、相手の国の文化や考え方の違いに直接触れることで、大きな驚きと感動を受けました。このような経験は、これからの私の人生にきっと役立っていくと思います。

私は、４月からは鹿児島大学の大学院に進学し、現在の研究を続けます。今までの出会いに感謝し、これからの出会いも大事にしていきたいです。

（理学部物理学科　重吉　亮一）

岩井田　千穂美

■卒業に向けて

2000年の春、私のこのキャンパスで過ごした６年間が終わる。あっという間の、しかし非常に充実した６年間だった。この６年間に得た知識や経験はここでしか得ることのできないかけがえのないものだったし、これからの人生に必ず有用であると信じている。

４月以降の進路はこの原稿を書いている今現在決まっていないが、これも私らしく生きていくための一つのきっかけかもしれない、と最近は前向きに考えることにしている。21世紀を背負うのはどういう形にしろ、私達なのだ。鹿児島大学の６年間で培った精神を活かして夢に向かって邁進し、恥ずかしくない人間になれるよう努めていきたい。

結果はどうであれ、私にとって有意義な６年間だった事は間違いない。有意義な６年、と言いきれる環境を与えて下さった諸先生方、事務の方々、両親、先輩方、友人達に心からの感謝を表して結びとする。

（理工学研究科　岩井田千穂美）

宗　　秀　典

■2000年を迎えて

私たちは2000年という節目の年に６年間の学生生活を終えて医療の現場に出ていきます。20世紀の100年間に医学・医療の世界は飛躍的に進歩しました。抗生物質などの薬やＣＴなどの画像診断はその良い例でしょう。この進歩は100年前の人々から見ればとてつもないものと思えるでしょう。しかし、いま医学は遺伝子工学などのより新しい世界に取り組みはじめ、さらなる進歩をとげようとしています。21世紀の医学はどうなるのでしょうか。

思えばこの６年間は、さまざまな知識を吸収するのに苦労した６年間でもありました。今後は医学・医療の一端を担うものとしてさらなる精進を重ね、少しでも社会のお役に立てればと思うばかりです。

最後になりましたが、在学中にお世話になった皆さまに心から感謝いたします。

（医学部医学科　宗　　秀典）

室　屋　真　二

■進歩。

最近気になる事を考えて見ると、社会的には、「オウム」「ライフスペース」「法の華」その他異常犯罪が多いことに驚く。科学はめざましく進歩しても、人間そのものは進歩していないようだ。大学に関しては独立行政法人化が大きな問題となっているようだ。先見の明に乏しい自分は独法化により発展につながる大学改革が出来るのか予測がつかない。しかし、教育機会の均等提供は何より優先すべきであり授業料の引き上げはあってはならないと思う。大学院で研究をしてきたため研究面の存亡も気になる。現状維持では欧米にかなわないと言われると少数精鋭論も理解は出来るが、研究面以外にも地域格差は波及するのではないだろうか。自分自身について考えてみると、今はただ単純に努力しているだけで自分の身の回りにも考えが及んでいないのが現状だ。インターネット時代、一社会人として広い視野を持ち行動出来るよう努めたい。

（医学研究科４年　室屋　真二）

特　集

永　光　英　之

■新しい門出にあたって

雄大な桜島を眺めながらの大学生活が、気が付けば６年も経ち、社会への門出が近づきました。振り返れば様々な出来事がありました。私達歯学部17期生はカリキュラム変更後初めての学年であり、試験・実習・学園祭などで常に手探りな状態でした。そのような中、２つのサークルの部長や桜ケ丘祭実行委員などを引き受ける事となり、非常に多忙な生活でした。様々な価値観を持つ人達の中で先々の事まで見据えつつ最大公約数を求めてゆくのは大変困難であり、悩む日々が続きました。そのような中、親身になって手を差し伸べて下さった先生方、職員の方々や先輩、級友、後輩との出会いが嬉しく、私にとって忘れ難い一番の想い出となりました。

社会に出てからも鹿大での生活を糧として現状に満足する事なく、納得できる日々を積み重ねて仕事に取り組んでゆきたいと思います。御世話になりました皆様、どうも有難うございました。

（歯学部歯学科６年　**永光　英之**）

大　森　健　一

■修了にあたって

今振り返ってみると、万事うまく過ぎ去った事よりも、辛く逃げ出したかった事の方が強い思い出として残っているから不思議です。印象材をテーマに実験に取り組んではみたものの、思うような結果が出せず困っている私を、平日はもとより土日もいとわずに指導して下さった先生方には本当に感謝しております。一つ一つの過程を確実に積み重ねていくことで、必ず結果は付いてくるということを痛切に実感しました。さらに、研究漬けの日々の中で一つのことを深く探求していく材料開発の面白さ、奥深さ、そして難しさを知ることができたのは、非常に有意義な体験でした。実験を重ね、データを分析し、自分の中で理論を構築していく間に、物事を思考する際に様々な角度からとらえていくということの重要性を改めて認識しました。これからの人生、このかけがえのない４年間の経験を生かせるよう、常に研究心を持って頑張っていきたいと思います。

（歯学研究科４年　**大森　健一**）

前　田　朋　也

■卒業と進学

大学に入学してから４年が経とうとしている。あっという間に過ぎていってしまった感じがする。大学に合格して、やりたい事やどんな事が待ち受けているのかという希望に胸を膨らませながら大学生活を始めたのがつい昨日のことのように思い出される。そして卒業が近づいてきてこの４年間を思い返してみると、楽しい事もあったし、たくさんの人に迷惑をかけてしまった事もあった。しかしその中から自分にとって数多くの経験を積むことができたし、いろいろな事を学ぶ事ができた貴重な時間であったと思う。本当に充実した４年間だった。

大学院に進学すると研究内容でのゼミや論文発表があり、内容もずっと難しくなるだろうから、今までに自分が得た専門知識でこれから通用するか多少不安である。しかし、学生時代に学んだ知識や経験を生かして、大学院での自分の研究について、さらなる勉強をし頑張っていきたいと思う。

（工学部電気電子工学科　**前田　朋也**）

木　村　至　伸

■「発想の転換」

否定的に捉えていた物事を肯定的に捉えることが出来るか、それが１つの「発想の転換」であると思う。例えば、同じ時計の針を見て『もう』と思うか、『まだまだ』と思うか。事実は変わらないが、自分の心構えは全く異なる。つまり、『もう』は自分の限界を決定するのに対し、『まだまだ』は自分の更なる可能性を信じることであると思う。言い換えるなら、プラスのイメージを持つことであると考える。人生には、幾多の壁が待ち受けていることであろう。この壁をどう捉えるか？消極的に臨むか、積極的に臨むかで、自分の取り組む姿勢が異なると思う。また、人生は一度しかない貴重な時間である。その時間を有効に使うのも、自分の心構え次第である。今の私に「発想の転換」が出来ているか疑問があるが、志を高く持ち、自己を高め21世紀に向かって飛躍していきたい。

（理工学研究科２年　**木村　至伸**）

特　集

木　下　祐　一

■新しい時代のはじまりに…

この原稿を書いているのは、2000年１月１日です。西暦2000年を迎え、新たな千年紀（ミレニアム）が幕を開けました。懸念されていたＹ２Ｋ問題は大きな問題も起こらず、新しい時代の一歩を踏み出した思いでいっぱいです。

私はこの３月で大学を卒業、そして就職の予定ですので、このミレニアムの始まりと同時に、私の社会活動もスタートします。今年の就職率が依然として低い状況に垣間見れるように、時代は変わっても、世の中の不景気はまだまだ続きそうな感じです。しかし、こんな時代だからこそ自らを信じ、努力したものが救われると信じて、これからの残り少ない大学生活、そして４月からの仕事に精一杯ぶつかっていきたいと思っています。

本学の獣医学科に在籍して６年が経ちましたが、20代の貴重な時間をこの大学で過ごせたことを非常に満足しています。そして、この６年間、励まし応援してくれた両親、先生方に深く感謝しています。ありがとうございました。

（農学部獣医学科　**木下　祐一**）

大　隈　浩　美

■修了するにあたって

私にとって大学生活は、学部３年生の時に本格的に始まった。高校時代から興味のあった「松枯れ」というテーマを得ることができたからだ。当初、研究というものが一体どういうものか皆目見当がつかなかった。しかし先生方や周囲の共同研究者、先輩方その他様々な方々に支えられ、どうにか修了を迎えつつある。精神的にも肉体的にも弱かった私をこれまで支えて頂いたことにとても感謝している。そのおかげで、テーマにそった３年間の一連の研究を通して様々な技術を身につけることができ、社会勉強にもなった。私の研究の中では失敗することも度々あった。これらについては後輩達が継いでくれることを期待している。

これから私は社会に出て環境アセスメントに関する仕事に就くことが決まっている。大学生活で身につけた技術をさらに研鑽し、これから待っているであろう困難に自分の持っている力を最大限発揮しながら立ち向かっていきたいと思う。

（農学研究科　**大隈　浩美**）

小　薗　裕　子

■卒業にあたって

大学の並木通りを歩き、自由な毎日を送る大学生活に憧れていた頃から４年が経ち、私は卒業の時を迎えました。

自然に成長することのできた今までとは違い、自分で成長していかなければならない大学生活。そういえば多くの事を自分で決めてきました。どの講義を取るか、どの講座に進むか、そしてどこに就職するかなど、そんな選択の積み重ねで私はだいぶ成長できたのではないかと今はそう思えますが、実際に過ごしてきた日々の中では私はやりたいことをたくさんしてもいつも何か物足りず、ただ何となく毎日を過ごしている気分でした。

しかし、それは私と同じく周りの皆も様々な事に挑戦し、様々な経験をして日々成長していたので、自分も成長しているという事に気付いていなかっただけだったのです。

大学に通えて本当に良かった。私はこの４年間で得た大きな自信や大切な思い出と共に新しい世界へと旅立ちます。

（水産学部水産学科　**小薗　裕子**）

佐　藤　保　大

■21世紀での恩返し

気づけば大学生活も終わりになりつつあります。大学入学当初は右も左もわからなかった鹿児島がいつのまにか目をつぶってでも歩けるくらいの場所になりました。６年という長い年月は様々な人のおかげで充実して過ごすことができたと思います。また同時に、私自身を大きく成長させてくれたことも忘れられません。この恩に報いるためにはやはり社会に出て活躍することであると思います。学生生活という温室の中で生きてきて、社会に打って出ていくというのは不安は大きいものです。しかし、それ以上に様々な人に鍛え上げられた自分自身を証明するためにも精一杯やって行きたいと思います。2000年という節目を迎えいよいよ21世紀になりますが、新しい世紀で活躍できる人間になることでお世話になったみなさんへの恩返しとしたいと思います。最後にお世話になった水産学部の教官、技官、事務官のみなさんにお礼を申し上げたいと思います。

（水産学研究科　**佐藤　保大**）

特　集

宇　都　沙智子

■３年間を振り返って

「卒業」を目前にして、入学してから今日までを振り返ってみると、さまざまなことを体験し学ぶことができたように思う。

今までの自分であったら行動に移せないまま終わったようなことでも、新しい友人に新たな刺激を受け、挑戦できたこともあった。また、実習中には、いろんなスタッフ・先生方と接し、たくさんの患者さんと会話をすることで、看護を学ぶだけでなく、これからの自分自身のあり方を考える良い機会になった。

こうして考えてみると、私の学びはいつも人との出会いが一緒にあった。今後もたくさんの出会いがあるだろう。それを大切にするのはもちろん、今までの出会いも大切にし、自分自身を伸ばし続けていきたい。いろんなことに挑戦していきたい。そして、自分らしい生き方を見つけられるよう努力していきたいと思う。

（医療技術短期大学部看護学科　宇都沙智子）

生　田　美和子

■感謝すべき出会い

鹿大医技短に入学してからもうすぐ３年間が経とうとしていますが、とても早く過ぎ去ったように感じられます。

来鹿した当時は友人や知り合いが誰もいない状況だったのですが、クラスメイトはもちろん、サークル、アルバイト、地域のソフトボールチームなどいろいろな方面に知人ができました。その人間関係の中で尊敬する人から学ぶことがあったり、友人と楽しい時間を過ごしたり、多くの有意義な出会いができたことに感謝しています。

４月からは社会人としての新しい生活が始まります。その環境でも多くの人との出会いがあると思いますが、私自身、人間的に成長できる要素を吸収していきたいと思います。また、他の人から何かを吸収するためには、周囲の人々を感知するアンテナの感度を良くしておくようにつとめたいと思います。そして2000年代ももっと人間的に成長していけたらと思っています。

（医療技術短期大学部理学療法学科　生田美和子）

ムラト　イ‐ギト

■私の日本

I came to Japan on April 1998.After 6 month of Japanese language course at the Ryuugakusei center of the University of Kumamoto,I came to Kagoshima on October 1998 and began my study at the Faculty of Fisheries of the University of Kagoshima.

I could a find a very friendly atmosphere in the laboratory,which made it possible to work in colaboraion in scientific field with Japanese students.

My field of study is Marine Nutrition. I am working on a research about the effects of protein and energy levels on growth performance and biochemical body composition of Japanese flounder (Paralichthys olivaceus) juveniles. During the field work of this experiment, I was consulted by my academic advisor in his laboratory.

Besides my study at the University, I learned many things about Japan,the language and the people. Before coming to Japan I knew only few words in Japanese; for example;
いち、に、さん、し。こんにちは、なまえは、さよなら、わかりますか、わかります、わかりません。

Eventhough my Japanese is still not so good, I can have conversation with Japanese and express myself in Japanese. I think that this language very interesting. I have problems with Kanji but of course it needs some time to learn Kanji.

If you can talk the language even a little bit, you have the chance o know more about the people, about customs and traditions. And you can built a bridge of friendship between your own culture and the Japanese one. I can say that I feel confortable as a Gaijin in Japan and sometimes I have the feeling as if I were in my own country. This might be because of kind and friendly Japanese people. I had been living abroad for a long time and had the chance to visit some other countries. Compared Japan with those foreign countries which I have been, in Japan I feel most confortable.

Maybe that is one of the reasons why I would like to continue my connection with Japan also after I go back to my country. I don't know yet in which perspective this connection with Japan will be,but one thing I know is that it will be for the friendship between Japanese and Turks.

じぶんのくににかえっても私の日本と日本のともだちのことをわすれません。いつまでもこころからおもいだします。

みなさまほんとうにありがとうございました。

（Murat YIGIT ムラト　イ‐ギト）

ヌルル　タウフィック
ロッチャマン

■日本・インドネシアと私の将来

この数年間にアジアの国々、特にインドネシアではさまざまな出来事が起こった。1997年にインドネシアは経済的に崩れたことをはじめ、国内の治安などもだんだん悪くなってきた。その時のインドネシア政府（ＯＲＤＥ　ＢＡＲＵ）はもはやそれらの問題にたいして解決することができなかったため、革命を求める多くの市民の運動が始まった。中でも一番激しかったのは大学の学生たちの運動だった。彼らのデモや活動などによって政治家まで考え方をあらためるようになった。1999年10月頃国家議員をはじめ、大統領・副大統領及び大臣などが新しく変えられ、よりよい政権が期待できるようになった。しかしバラバラの状況を立て直すことはやはりあまりにも大変である。あらゆる分野で準備をととのえなければならない。

今の状況はまだ経済的に落ち着いていない。インドネシアを支える科学技術もまだまだ遅れている。1985年から次々に日本などの先進国へ留学して帰ってきた技術者たちの活躍はまだ始まったばかりである。また海外で勉強や研究している又は続ける人もまだ大勢いる。その中の一人として私は1990年に来日した。あっという間に10年間となり今年鹿児島大学の博士課程を卒業することになる。

これまでやまほどたくさんの基礎科学の知識を勉強し、６年間ほど本格的な実験・研究を行なってきた。日本にいる間、知り合った人々や友達などと交流や助け合いをしてきた。しかしきたる21世紀へ向けてグローバルになりつつあるこの世の中でインドネシアにおける科学技術の開発の準備を行うためにさらなる研究が必要である。私も今年３月博士課程を卒業することとなるが、もう少し日本の会社・研究所において実際の研究を経験してみたいと思う。将来も日本の大学や研究所と共同研究を行い、インドネシアをはじめアジアの国々の科学技術の開発に貢献したいと思っている。

（ヌルル　タウフィック　ロッチャマン）

特　集

退 官 に あ た っ て

井　上　晃　男

■新しい手帳

30年来同じ手帳を愛用してきた。年末になると、毎年新しい手帳を求め、一寸気をひきしめつつ元旦から使い始め、予定やら日記とは言えないほどの簡単な日々の心覚えを記入してきた。今、若い頃のものをくってみると、さして変わったこともなく、ごく単調な毎日が続いたらしく、空白の日が多い。一方、近年の手帳には、会議や遊びの日程がぎっしりと詰まっており、また日ごとのメモで余白が少ない。今年もこれまでと同様、2,000年用の新しい手帳を準備し、新年早々から使っている。

さて定年後の４月以降のことである。朝起きて、はて今日をどう過ごそうかと思案する生活の中で、もうこの手帳は要らないのではないか。覚えきれないほどの予定や、記憶に止めておきたいほどの出来事はないのではないか、とも思う。でも幸い健康である。だから、せめて何か新しいことに挑戦して、その遅々とした進歩の記録でこの手帳が埋まるような毎日を送りたいと考える。

（多島園研究センター長　**井上　晃男**）

大　嵩　禮　造

■一からの出直し

わたしが本学へ赴任したのは1971年である。１から始まって０に終る。まことに見事な語呂合わせになってしまった。あの頃はまだ学生運動も盛んで、夜更けまで続く教授会の終るのを学生達が下で待ち受けているといった活発な時代であった。日本も上昇中の真只中の頃であったから、大学の内外も燃えはじける火種を一杯抱えて、前へ前へと向っていた。あれからほぼ30年、暗い世相になったものだ。冷え切った景気は帰る術を知らず、陰湿な事件が続発している。もう一度あの頃の元気を取り戻したい。空元気でも何でも良いから、背筋をシャンと伸ばして歩いてゆきたい。ふり返れば、そう思い、そう信じて歩いてきた我が道も、何程の事を成し得たのか、内心忸怩たるものがあるが、ここに至ればもう肚を括って、せめて一から出直しの大見得を切る以外にない。永い間本当にお世話になりました。心から厚く御礼申し上げます。

（教育学部教授　**大嵩　禮造**）

宮　路　　廣

■ミレニアムの年に退く幸せ

西暦2000年の節目の年、千年紀（ミレニアム）を祝うカウントダウンの祝賀行事が各地で行なわれ、世界中の人々が例年と少し違う思いを2000年に託した年に、私も退官という区切りを迎えることができることを感慨深く幸せに思います。

教育学部助手として勤務を命ぜられてから40年になります。「大学人として教育・研究の役割を十分果たしたか」と自問するとき即答すべき明確な言葉は見つかりませんが、こうして無事停年退職の日を迎えることができるのも、私を育て導いて頂いた鹿児島大学のお陰です。これまでいろいろご指導ご助言を頂いた多くの先生方や職員の方々に心から感謝の言葉を申し上げます。これからの情報化社会においては、多くの情報をもとに目指す方向を見つけること即ち情報のインテリジェンスが重要となります。変革の時期、時代の変化に的確に対応した新しい大学の発展を期待し、皆々様方のご健勝を祈念いたします。

（教育学部助教授　**宮路　　廣**）

黒　岩　忠　義

■立ち止まる

新たな「千年紀」が静かに幕を開けた。私はこの節目の年に定年を迎えることを幸せに思う。赴任した年は1969年４月であったから、社会的には70年安保を巡る争乱のさなかであった。それから31年の歳月が流れたことになる。しかし、振り返ってみると、内外共に、随分いろいろのことを経験したことになる。学内的には学園紛争、大学の数次にわたる改革論議など。また、国内的には陰湿で、暗い事件が次々と起きながら20世紀は今終わりを告げようとしている。そのような激動の時代を、小生もまた及ばずながら学生達と真剣に議論し、苦楽を共にしてきた。しかし、大学はいま再び、少子化減少にともなう「独法化」の新たな波に曝されようとしている。そんな中、私はいま「停年」ならぬ「定年」を迎えて、いまいちど、自ら立ち止まり、これまでの自己の来し方を振り返り、修正し、方向を定め、自己に忠実に新たな道を希望をもって歩いていきたい。お世話になった数知れぬ多くの方々に厚くお礼を申し上げる。

（教育学部教授　**黒岩　忠義**）

特　集

佐　竹　　巖

■更なる発展を

本学理学部に着任以来早や24年が過ぎました。当時の理学部は、１号館と現在の半分の広さの２号館があるだけで、大学院も無く、こじんまりとした小世帯でした。しかし、現在では博士課程を持ち、教官数も80名を越す学部へと発展し、まさに今昔の感があります。

この間、組織再編を含む大学改革の波に翻弄された一時期も有りましたが、今となってはそれも懐かしく思い出されます。24年間の永きにわたり、理学部の暖かい雰囲気の中で、自由な研究と教育に従事できました事は、ひとえに多くの教職員の方々の終始変わらぬ御指導と御協力の賜物であり、心から御礼申し上げます。

前任地の九大を含めると37年間大学に奉職した事になりますが、過ぎてみれば長いようでもあり、また短いようでもあり複雑な想いが交錯します。時あたかも西暦2000年、20世紀の遺物が大学を去るには格好の時期でしょう。独立法人化の問題等、また多難な時を迎えようとしていますが、本学の益々の発展を心から祈ります。

（理学部教授　佐竹　　巖）

山　下　　智

■鹿児島大学の将来を期待しつつ

私が本学の教養部に赴任したのは、全国的に大学紛争が吹荒れていた昭和44年で、当時、大学本部は一部学生によって封鎖され、学長は代行制をとっていました。教育や研究に対する私なりの張りつめた気持ちが大いに殺がれたことは云うまでもありません。大学紛争が落ち着いた後も、教養部では改革問題がくすぶり続け、心の安まる時はほとんどなかったように思います。この間、多くの教職員の方々や学生達と交歓できたことに対しては感謝のほかありません。

大学は、今まさに、これまでにない大きな変革に遭遇しようとしています。この二千年という節目の年に退官を迎え、私的な安堵感はあるものの、私の脳裏に映る大学の前途には期待と不安が錯綜していて、素直に喜べる心境にはありません。大学人にとって、あるべき大学の姿をどう捕らえ、どのように行動するかが今ほど求められている時はないのではないでしょうか。

（理学部教授〈附属図書館長〉　山下　　智）

福　田　健　夫

■2000年に思う

西暦2000年の今年はミレニアムとして、また21世紀を迎える最後の年として記念すべき年であります。私自身にとりましても定年退官という生涯の中で大きな節目に当たる年でもあります。考えてみますと、20世紀は日本にとりまして前半は戦争、後半は平和の百年でありました。科学・技術、経済の発展はめざましく、まさに激動の世紀であったと思います。しかしここ数年はバブルの崩壊、オウム真理教事件、金融機関の破綻などまさに世紀末の様相を呈しています。

来るべき21世紀はどうなるのでしょうか。これまでは科学・技術の発展が人類の幸福に寄与することを疑いませんでした。しかし臓器移植でみられるように、脳死の判定のような新たな問題を提起しています。ヒトのすべての遺伝子の解明もそう遠くはないでしょうが、そこからまた別の問題が起こると思います。20世紀は科学や経済のような、あまりに物質的な面に偏重しすぎて、大切な「こころ」の面を置き去りにしてきたように思います。21世紀がその繰り返しにならないことを祈ります。

（医学部教授　福田　健夫）

山　元　篤　朗

■保健学科の充実・発展を願う

ミレニアムの節目に退官を迎えるのも何かの因縁だろう。医療技術短期大学部創設以来14年の歳月の経過も実に早く感じられる。先ずは第一期生を世に送り出す事に専念する。

試行錯誤を重ねながらも1989年第一回卒業式にこぎつける。同時に専攻科の二特別専攻の設置が認められ、医技短の展望は次なる段階へとふくらむ。1998年10月、四年制化の望みがかなえられ、医学部保健学科が発足する。1999年度は医技短生は13期生で最終となり、保健学科第一期生が入学、2000年４月には２期生が入学する。20世紀末の10年間は驚くほどの早い社会変化の波が押し寄せた感が深い。21世紀はすぐそこまで来ており、20世紀の最後の頑張りを要求している。保健学科の完成はまさに、21世紀初頭に実現するものであり、幾多の問題が山積するのも必定。保健学科所属の皆さん、健康に十分留意され、和をもって御精進下さい。いつまでも、外野より熱い応援を続けたいと思います。

（医学部教授　山元　篤朗）

特　集

井　上　勝一郎

■退官までを振り返って

昭和56年11月に赴任してから18年と５ヶ月、早くも退官の時を迎えました。この間を振り返ると、ただただ忙しい日々だったの一言に尽きる様な気がします。赴任からの数年間は研究に必要な器械器具の整備・拡充に奔走し、その後は、会議会議で明け暮れた様に思います。大学院の学生諸君の実験指導は殆ど夜となり、私自身の要領の悪さも加わって、いろいろと迷惑をかけたという印象が強く残っています。教室員の先生方に助けられ、どうにか無事退官を迎えることが出来ましたが、今、振り返ると研究面でもう少し時間的なゆとりが欲しかったというのが実感です。

現在、学内では教養部改廃統合後の共通教育の問題、国立大学の独立行政法人化の問題など、多くの難題を抱えていますが、これらの問題を克服し、21世紀に向け鹿児島大学が益々はばたくことを祈念して退官の挨拶とさせていただきます。

（歯学部教授　井上勝一郎）

松　村　博　久

■老兵の反省

鹿児島大学へ赴任以来36年とその前の他大学の６年を加えた42年間を無事勤め上げて（？）の定年退官です。今までの人生の３分の２を研究と教育にたずさわってこれたのは、周辺の教職員ならびに関係者の皆さんのご指導およびご支援があったからです。ここに深い感謝と厚い御礼を申し上げます。

現在の経済社会の繁栄や家庭生活の豊かさは、大量のエネルギー消費で築き上げられてきたものです。エネルギー資源のほとんどを国外に頼っている状況ですから、エネルギー源の新規開発やエネルギー有効利用の技術推進についての研究と教育に努力してきました。わが国の将来に向けたエネルギー安定需給の一端しか担えませんでしたが、余生は老兵の小さな力でもって、蓄積してきた専門を使ったボランティアで社会に貢献できればと思っています。創立50周年を迎えた鹿児島大学が、地域および国際舞台において飛躍されることを期待いたします。

（工学部教授　松村　博久）

鎌　田　薩　男

■夢追う鹿大よ永遠であれ

幾度目かの春の訪れと共に停年退官の日を迎える事になった。まだやるべき事を残していた私にとって、この退官の節目には、やや戸惑いを感じている。

大学から眺める桜島の雄姿は、明治維新の頃とあまり変わらないと思うが、2000年の新しい時代を迎えた今日、独立行政法人化問題が到来し、鹿大にもその機構改革が強く望まれている。かって、工学部の古き先輩教授から、“わし等の頃は大学存続と研究の基礎作りに努力してきた。君等にはこの基盤の上に工学部を発展させるべき責務がある”と励まされてきた。以来、大学本来の姿に近づき、博士取得を可能にした。これこそ研究を担う学部に発展したといえる大学の卵の誕生であろう。今後は日本南端のユニークな大学として、若き人達がこの卵を大きく発展させ、研究技術の情報発信基地としての夢追う大学である事を祈念する。

（工学部教授　鎌田　薩男）

堀　口　　毅

■大学はポランのひろば

今年がいわゆる「昭和一桁生れ」が定年退官する最後の年になります。私がちょうど小学生の時戦争に敗れ、社会の価値観が軍国主義から民主主義へと180度転換したことが私の人生に対する考えを大きく左右することになりました。どうしたら本当のことを知ることができるのかを一生懸命に考え、戦没学生の手記「きけわだつみのこえ」などを読んで、大学生は真実を知っていたのではないかと思い、大学に入って勉強したいと思いました。教科書の「雨ニモマケズ」の詩が印象的で、「貧しさからの開放」が重要課題のように思われ、農学を志すことにしました。

幸い人生の大半を大学で過すことができました。私の学生時代は貧しかったけれども、仲間をつくって夢を語り合う自由な「ひろば」があり、私自身は地域活動をしながら学生時代を過しました。この頃の大学は豊かさの半面現実的になり過ぎているように思われ残念です。この鹿児島の地にすばらしいイーハトーヴォがつくられることを願っています。

（農学部教授　堀口　　毅）

特　集

石　畑　清　武

■開拓は無限

あらた魂に惹かれて、鹿児島大学農学部附属農場指宿植物試験場に赴任したのは昭和35年２月であった。この頃の試験場には約250種類の遺伝資源作物が保存されていたが、研究施設は淋しかった。大正７年から、温泉熱と熱帯植物を利用した農業は全国に貢献しており、鹿児島大学の誇る施設と自負できた。

昭和37年には皇太子・同妃殿下（現天皇・皇后陛下）のご訪問を受けた。その準備に数カ月余り昼夜職務に追われ、植物類の学名を覚えたこと等は生涯の想い出である。

以来、海外学術調査の多くの機会をいただき、調査国の理解と協力を得て3,000種以上の熱帯・亜熱帯作物類を植物試験場へ導入し、それらを評価して、協力先へも報告した。

導入種のうち、直接利用できた数10種は地域へ送り出した。形質改善を行なうことで、温帯地方で生産でき、それらの持つ機能性の恩恵を期待できる種が多い。

遺伝子を動かしている機構はまだ不明であるが、21世紀にはあらゆる生物の遺伝子情報は解明されると確信する。研究者は際限なく研究に挑んでほしい。2000年はその道を拓く年となることを期待したい。

（農学部教授　石畑　清武）

東　川　勢　二

■万里の海を駆け終えて

海上勤務（37年間）という肉体的にも、精神的にもきびしい条件下で、定年退職の日を迎えることができたことは感慨深いものがあります。そして、船の安全管理、安全運航に全力を注ぎ、職責を全うできたことは、かごしま丸職員、教職員の皆様の協力のたまものと感謝の気持ちでいっぱいです。顧みますと、毎年インド洋や、南太平洋などへ練習航海し、長期実習訓練のなか学生達と海について学び、考え、練習船教育の使命を果たしてきました。また諸外国寄港地では大学訪問や、一般市民、在留邦人、鹿児島大学卒業留学生の皆さんと友好親善に尽くし、鹿児島大学の練習船かごしま丸として、自信と誇りをもって万般の活動をしてきました。そのため、かごしま丸は諸外国各地でそれなりの評価は得られていると自負しています。しかしいま、練習船は縮小されようとしています。広く論議をつくしよりよい解決策をだしてほしいものです。終わりに鹿児島大学の益々の発展と皆様方のご健勝を祈念します。

（水産学部教授（かごしま丸船長）　東川　勢二）

福　永　　孝

■思い出

私が大学事務に携わった当時は、今と同じく就職難でありました。従って、どんな職業でも良いから、とにかく職に就くことしか考えていなかったことが思い出されます。それから40年経た訳ですが、大学事務の中で特に印象に残っているのは、昭和40年頃、国立大学が特別会計となったとき、いろんな事業予算が計画され、その対応に日夜仕事に追われたこと、平成５年全国の国立大学附属病院が赤字財政となり、その対応に病院長と一緒に取組んだこと、平成７年神戸大で、関西大震災直後、その災害復旧に休日返上で対応したことなどが思い出されます。今まで多くの先輩や同僚、後輩に恵まれ今日の私があるとつくづく感謝しています此の頃です。定年後、自分の進む方向が定かでない現在ですが、少々の空白時間をつくりじっくり考えたいと思っています。鹿児島は二度の赴任地でしたが多くの友人が出来、大変楽しく仕事をさせていただきました。本当にありがとうございました。

（医学部　福永　　孝）

川井田　清　広

■20世紀の私

私は昭和42年に鹿児島大学経理部経理課の会計事務として採用され、その後様々な学部の事務に携わりました。その中でも病院受付事務をはじめ、入来牧場での牛のセリ市、水産学部での船舶の外国入国手続など多種多様な経験をする事ができ、専門の方や諸先輩の協力を得て、仕事の厳しさを学びながら自分の幅を広くすることができました。

また、定年前の最後の年に2000年問題対策のために緊張の中、新年を迎えるという貴重な体験ができました。まさに時代が移り変わる瞬間を見たようでした。

さて、私は20世紀最後の年に定年を迎えた訳ですが、アナログ時代が終わりデジタル時代が到来したように次代を担う若者も古き伝統等にこだわらず進化してください。鹿児島大学は今後独立行政法人化への難題がまちうけております。良き伝統と斬新な発想が融合する大学と生まれ変わってほしいものです。最後にこれまでお世話になりました皆様方のご健勝とご発展をお祈り申し上げます。

（歯学部　川井田清広）

特　集

米　森　美智子

■私の42年間

鹿児島大学50年の歴史のうち、42年間を私はここで過ごさせていただきました。

昭和33年、庶務課に採用されました。本部は今にも倒れてしまいそうな古い木造二階建の校舎で、廊下はソッと歩いたものです。

就職の翌年10周年記念の祝賀会が教養部の中講堂で行われたように記憶しています。

その後は、大学紛争の中で本部が封鎖され、間借りの中、不自由な事務処理をした事、次々に高層建築の校舎が建ち並び、立派に成っていった事など、昔日の感があります。

「公務員は男女差別が無いから良いですよ」鹿児島大学に就職が決まったときの、高校の担任の言葉でしたが、現実は非常に厳しいものでした。多くの先輩方の励ましと、若い方々に支えられてようやくここまで来ました。

学部改組、事務一元化等の嵐の後、今度は、法人化の嵐が待ち構えているようです。

21世紀まで後１年、嵐の後に明るい青空が待っていることをお祈りします。

（理学部　米森美智子）

原　口　　典

■2000年ミレニアム

昭和34年４月は皇太子・美智子妃殿下の御成婚を国民がＴＶで観られた年です。この年に私は鹿児島大学に奉職しました。今思いつくままに、数多くある思いでの中から抜粋して記すと、70年安保で14時間も閉じ込められ、開放された翌日はジプシー生活でやっと取り戻した職場は荒廃されており、タイプの文字盤は裏返されて、活字3,500字を一個ずつ怒りながら配列した思い。

近くには、全国で教養部の廃止・改組のため担当者として定例48回に及ぶ教務委員会カリキュラム・非常勤講師・規則の改廃等々特に学生の不利益にならない様にと「乾坤一擲」の闘いでした。無力な私も学部長・各委員の先生方、先輩の絶大な助言・協力を頂き次の事務担当にバトンタッチ出来たこと。

2000年～3000年ミレニアムに向って雄大な「ゴトク」を学生・教官・事務官の三本脚で立って欲しいと念願します。

41年間ありがとうございました。

（教育学部　原口　　典）

創立50周年記念式典学長式辞

式　辞

学　長　　田　中　弘　允

本日ここに、御来賓並びに関係各位の御臨席を得て、鹿児島大学創立50周年記念式典を執り行うことができますことは、私どもにとりまして大きな喜びであり、光栄に存ずるところであります。

御多忙の中をご参加くださいました、文部省高等教育局遠藤審議官、本県選出の代議士の皆様、須賀鹿児島県知事、赤崎鹿児島市長、ブキャナン　ジョージア大学農業・環境学部長並びにカネマス教授、鹿屋体育大学江田学長並びに学長の皆様、鹿児島大学創立50周年記念事業後援会鮫島会長並びに関係の皆様、蟹江先生並びに歴代学長の皆様、同窓会の皆様、本学教職員OBの皆様並びに関係各位に厚く御礼申し上げます。

本学は、国立学校設置法公布により、昭和24年に、第七高等学校、鹿児島師範学校、鹿児島青年師範学校、鹿児島農林専門学校、鹿児島水産専門学校を母体として創設されました。敗戦直後の混乱期の中にあって、県民各界が総力を結集し、５つの母体となった校長の皆様や文部省当局の御協力を得て、文理学部、教育学部、農学部、水産学部を以って創立をみたものです。本日ここに、当時の関係各位の御努力に対し心から敬意と感謝を捧げたいと存じます。

昭和30年７月１日には、国立大学設置法の一部改正により、鹿児島大学発足前より懸案となっていた鹿児島県立大学医学部並びに工学部の国立移管が決まり、本学は６学部を擁することになりました。

さらに、昭和40年には、文理学部が改組され、法文学部、理学部及び教養部が発足しました。また、昭和52年には、歯学部が設置されました。

一方、平成３年７月には、「大学設置基準の一部を改正する省令」が公布され、鹿児島大学も４年間にわたる全学的討議の後、教養部廃止転換と各学部の改組充実が行われました。この間、大学院研究科も順次整備されました。

現在、法文学部、教育学部、理学部、医学部、歯学部、工学部、農学部、水産学部の８学部と８研究科並びに附属図書館、地域共同研究センター、総合情報処理センター、遺伝子実験施設、多島圏研究センター、アイソトープ総合センターなどの全学附属施設等をもつ総合大学に成長いたしました。

現在の学生数は、約10,000名、大学院生は約1,000名、教官数約1,200名、事務官数約1,100名を数えます。

本学は、外国の22大学と学術交流をもっており、38カ国から237名の留学生を受け入れています。

産学官連携は、地域共同研究センターを中心に大きな発展をとげつつありますが、鹿児島県新産業育成財団の産学連携推進室がセンターの中に設置されてからは、特に技術相談や共同研究の数が増加しています。公開講座等の社会教育活動は、県内各地から離島を含む南九州全域にわたって行われており、いずれも高い評価を得ています。

創立以来50年間の卒業生は、学部学生59,365名、大学院生5,372名、合計64,737名であり、この中に1,440名の外国人留学生が含まれています。

卒業生の皆さんは、世界中至る所で、また様々な分野で活躍を続けておられます。鹿児島地方についてみますと、文化・産業・社会・教育等ありとあらゆる分野で指導的役割を果たし、地域の発展に大きく貢献しておられます。特に県や市の公務員の活躍にはめざましいものがあります。

また私どもは、世界に誇るべき超一流の研究を含む数多くの研究成果をあげ、知の創造に寄与して参りました。最近では、２つの全学合同プロジェクトを発足させました。１つは、「大地・食・人間の健康を保全する環境革命への試行」であり、他は、「新しい関係性を求めて－コミュニケーションの諸相－」

であります。いずれも全学部の研究者が参加して、現代社会の主要課題を研究し、政策提言を目指しており、また新しい「知」の枠組の形成も目標の一つとしています。研究者の努力により既に成果があがりつつあります。

今世紀特にその後半の50年は、極めて大きな激動の時代でありました。21世紀ともなれば、世界が更に大きな変化をたどるであろうことは明らかであります。このような時、私ども鹿児島大学は何を目指し、如何に行動すべきでしょうか。

12世紀にヨーロッパに発生した「大学」は、世界中で様々の変遷や発展をとげ、社会の中でなくてはならない存在となりました。それは、大学が知の中心であるばかりでなく、社会の発展に不可欠であるからであります。

大学の役割には、文化の批判的継承、知的創造、豊かな人間性と幅広い教養をもつ社会人の育成、社会活動があります。

これらの重要な役割を果たすには、時代・社会の要請に充分に対応することが必要でありますので、大学の機能は、時代とともに進歩しなければなりません。このことは、もちろん教育、研究、社会活動のいずれにおいても必要なことであり、私どもは創意、工夫、研究する心と大きなエネルギーでもって、これらの問題を解決しなければならないのであります。しかも、これらの進歩・改革は、他者からの力によってなされるべきものではありません。なぜなら、学問や教育にとって自由こそが最も重要であるからであります。幸運にも学問に携わる機会を与えられた教官や、それを支える役目を担う事務職員が、主体性を持って前進しなければならないからです。

したがって、私ども鹿児島大学は、本学独自の構想を策定し、その実現に全力をつくさなければなりません。

以上の基本的な考えを鹿児島大学について具体的に述べてみたいと思います。

まず教育では、学生が来たるべき21世紀の社会において自己実現に必要な職能、豊かな教養と人間性、社会的役割の認識を身につけることを目指したいと思います。

研究では、伝統的学問体系における独創的研究、社会的・地球的課題の研究、地域の活性化のための研究などのさらなる発展が必要です。これには、「鹿児島学」が重要な部門として含まれなければなりません。

社会活動では、地域に開かれた大学として、本県特有の諸産業の発展や開発、ベンチャービジネスの創出などがあり、リサーチパークの設置なども必要となります。

これらのほかに、鹿児島大学は国家や地域における知の中心として、より積極的な役割を果たさなければならないと思います。それは、社会の枠組やあり方への積極的な参加であり、発言であります。例えば、わが国の高等教育・研究のあり方について充分検討し、あるべき姿を社会に提言すること、あるいはよりよい民主主義国家をつくり上げるために必要な政策提言を行うことなどがあげられます。

また、鹿児島地域における大学等の有機的連携の計画・実行、あるいは幼児から小中高校を経て大学までの教育、または生涯にわたる教育の総合性の検討なども行うべき課題です。

さらに、現代の物質文明社会における過度の経済効率の弊害も重要な課題として取り上げねばなりません。われわれの社会では今や人間性はだんだん失われ、職業に生甲斐を求めることができない人々は失望しつつあります。物質文明の申し子である時間泥棒によって、自らの貴重な時間が奪われ、人間らしさが失われています。私どもは、これらのことを明確に認識し、社会へ働きかけ、あるべき姿へと変えていかねばなりません。私どもこそ先頭に立って進まねばならない立場にいると思います。

さて、本日はおめでたい席ですので、やや躊躇するのでありますが、ここで私どもにとって困難な問題に触れなければなりません。

本学は、開学以来、自己改革を進めて参っており、その成果は、着実にあがりつつあります。しかしながら、最近持ち上がった独立行政法人化が、もし鹿児島大学に適用されるという不測の事態が出現すれば、私どもの努力は道半ばにして残念な結果に陥ることになると思われるのであります。

国立大学の独立行政法人化は、従来のシステム即ち国税等からの財源をもとに各地の国立大学に教育資源の再配分を行い、日本全国の均衡ある発展を達成してきたシステムを廃止し、高等教育・研究を市場原理に任せることを意味します。その結果、大企業や人口が少なく、研究助成金等を得にくい地方の大学では、入学金や授業料等の値上げは避けられ

ず、地方に住む子弟はいくら優秀でも進学できないことになります。また地方大学の教育・研究の質が低下することは明らかです。したがって地方が、文化的、政治的、経済的に破壊されることが強く懸念されるのであります。

高等教育・研究は、21世紀わが国土の均衡ある発展のために国によって保証されるべきシビル・ミニマムであると思うのであります。

私どもは、上に述べた諸課題を皆さんの御協力を頂き、地域社会の一員として解決していかなければなりません。そのためには、鹿児島大学独自のアイデンティティを明確に定め、自らの足でしっかりと鹿児島の大地を踏みしめ、目は遠く地球の隅々にまで、また、宇宙の果てまでも見据えなければなりません。

私ども鹿児島大学は、人文社会学、理工学、農水産学、生命科学等幅広い教育・研究領域をもっています。また鹿児島は、本土の南の玄関口に位置しており、東南アジアに近いこと、自然に恵まれていること、日本の食糧基地であること、離島が多いこと、２つの世界的なロケット基地があること、自然災害が多いことなどの特徴をもっています。今からおよそ450年前にはザビエルが上陸し、種子島に鉄砲が伝わり、日本全国に大きな影響を与えました。また、西郷さんに代表される鹿児島の先輩達は、明治維新の原動力となったのであります。

これらの特徴即ち「学問の総合性」、「地理的特性」、「歴史的特性」は、本学の独自性を支えるものであり、これを基にした今後のさらなる発展が期待されています。

次の50年において、本学が大きな発展をとげ、世界で、地球上で、また鹿児島でなくてはならない存在であり続けるよう全教職員、学生共々全力をあげて努力したいと思います。

これをもちまして、式辞といたします。
ありがとうございました。

学内だより

21世紀の鹿児島大学に新しいサークル棟を

補導協議会委員長　学生部長　　野　　勉

学生の厚生補導に関する事項を話し合う補導協議会においては、新サークル棟を含む課外活動施設整備について、昨年度から課外活動施設整備部会を設置したり、アンケート調査を行うなど、積極的に審議しているところです。そこで、「21世紀の鹿児島大学に新しいサークル棟」を実現するために、補導協議会の見解を表明し、学生及び教職員の課外活動施設への関心を高めてもらうことにしました。補導協議会としては、この件についての初めての広報であり、皆様のご意見等をお待ちしています。

…魅力的な鹿児島大学へ一歩…

現在、鹿児島大学には126の部や同好会などのサークルがあり、多くの学生諸君が活発に活動しています。学内には、三サークル棟がありますが、このうち理学部西側の自然サークル棟と教育学部キャンパスの教育サークル棟は、どちらも築40年をこえる老朽化した建物であり、ここで活動しているサークルのメンバーは雨漏りなど様々な不便に耐えているばかりでなく、建物の損壊による危険にもさらされています。

大学の魅力は教育、研究に加えて、活発なサークル活動にもあり、そのためには、活動の支えとなる課外活動施設の整備は欠かせません。より魅力的な鹿児島大学創生のために「新サークル棟」の建設は大きな一歩となるでしょう。

…深刻な財政問題…

一口に「新サークル棟」の建設といっても、困難な問題を多く抱えています。特に、経済的な問題は深刻です。老朽化した二つのサークル棟の延べ面積はおよそ1,582平米であり、これと同面積の建物を新築するには多額の予算が必要です。

ところが、最近の経済状況の悪化に伴い、大学の予算はほとんど据置の状態であり、現在でも厳しい運営を余儀なくされています。このような状況の中で「新サークル棟」を実現するには、学生と教職員が力を合わせて、文部省に予算要求を行うしかありません。より多くの学生及び教職員の粘り強い活動が必要です。

教育サークル棟

自然サークル棟

…みんなが使える建物を！…

一部の学生の皆さんは、すでに新サークル棟の建設のために活発な活動を行っています。しかし、残念ながらその主張には一部実現不可能なものが含まれています。

現在、学友会に公認されたサークルだけで126団体あります。このうち、52団体には部室がありません。さらに、未公認ながらも活発な活動を行い、学友会へ加盟を希望する団体を入れるとそれ以上の数になります。これらすべての団体に部室を割り当てるには大規模な施設が必要であり、非現実的です。また、サークル棟といえども、国有財産に変りはありません。国民の税金を使って建てる以上、責任ある管理が求められます。

…施設運用面では弾力的に…

補導協議会としては、できるだけ多くのサークルに利用してもらうために、特定のサークルの活動の場として利用するのではなく、多くのサークルが共同で利用できるような施設が良いと考えています。サークル活動に必須の物品を納める倉庫、サークルの集会に使えるミーティング室、サークル間の交流が可能な広い会議室など、開かれた共用施設を想定しています。さらに、国有財産管理上、「自主管理」は考えられませんので、実際のサークル活動に合わせた利用ができるように、運用面では利便性を重視して、できる限り弾力的な対策をとるべきだと考えます。

この件に関しては大学側は、新サークル棟を利用するサークルの意見を十分に聞き取り、活発なサークル活動が可能な管理、運用体制を提案していきたいと考えます。

…新サークル棟実現のために…

現在のサークル棟の老朽化は深刻な状況です。また、多くのサークルには集会を開く場所も、資材を置く場所もないのが現状です。このままでは、建物の老朽化が進み、危険建物として、ついには取り壊すほかなくなります。その結果、多くのサークルは拠点を失ってしまいます。そうなってからでは遅いのです。多くのサークルが活発に活動できる21世紀の魅力的な鹿児島大学のために、「新サークル棟」の建設を推進しましょう。

遠い道のりですが、新サークル棟の利用形態や管理については関係者全てが真摯に、英知と譲り合いをもって、解決すべきです。

そのための第一歩として、補導協議会では「新サークル棟」について、すでにアンケート調査を行いました。これからも皆さんのご意見を募集します。あなたにとって、使いやすく、便利なサークル棟とはどんなものでしょう。ご意見は郵送、学内便、電子メールにて、以下の宛先にお送り下さい。

多くの学生、教職員のご協力をお願いします。

宛先：〒890－8580　鹿児島市郡元一丁目21－24　鹿児島大学学生課
電子メール：
kagai@kuasmail.kuas.kagoshima-u.ac.jp

なお、いただいたご意見は今後の広報活動などで紹介させていただく場合がありますので、ご了承下さい。匿名希望の方は、その旨明記して下さい。

鹿児島顔談話会の発足

顔談話会代表　　伊　藤　学　而

最近、顔についての関心度が非常に高く、昨年度は東京の国立科学博物館において大“顔”展なる博覧会も開催された。歯学部でも、普段の歯科治療を通して顔についての関心は高くこの度鹿児島顔談話会を発足した。会員は現在のところ数名であるが、本年８月19日（土）～20日（日）にはこの会が中心になり鹿児島での日本顔学会顔フォーラム2000が開催されることも決定している。本会は、今後、顔に関して興味をいだく人々に広く声をかけ広げていこうと考えている。現在の会員を紹介する。

①　口腔解剖学Ⅱ講座（島田和幸）

感情表現に関係する表情筋群の形態とそれらの筋群への支配神経分布の様式についての基礎的研究をテーマとしている。

②　歯科矯正学講座（伊藤学而）

矯正歯科治療では、歯並びや噛み合わせ、口元や顎の形を整えます。治療が終わると、患者さんの表情も明るくなります。しかしこれだけが目的ではありません。矯正歯科治療によって咀嚼、嚥下、発音という口の働きが改善し、歯の破析や口腔粘膜の損傷を予防し、齲蝕や歯周病に罹り難くなることも大切な目的です。口元を中心とした顔の形と機能、さらに顔のもつ社会性が私達の大切な研究テーマです。

③　口腔外科学Ⅰ講座（杉原一正）

口腔外科的疾患と顔：口や顎骨、顔面には口唇口蓋裂などの生まれつきの病気から顎骨骨折、口腔癌、歯性炎症、顎変形症など生後にもいろいろな病気が発生し、進行しますと顔の変形を来します。手術により治療しますと術後に口や顔の変形や瘢痕が残る場合があり、口や顔はいつも人目にさらされるため患者さんの心理面や社会的活動に影響を及ぼします。形態的にも機能的にも患者さんに満足してもらえる口腔外科治療をめざしたいと考えております。

④　口腔外科学Ⅱ講座（三村保）

口腔外科の正式欧文呼称は顎・顔面・口腔外科で診療科名に顔が入っている唯一の科です。当科で最も多い手術は、口唇口蓋裂患者の口唇形成手術、口蓋形成手術で以下、顎変形症の外科的矯正手術、顎骨骨折を含む顔面外傷、口腔癌治療などで、日々患者さんの顔をいかに良く治すかに取り組んでいます。治療成績向上には、手術後の顔の形を客観的に評価することが不可欠です。そのために顔の形や顔面骨の形を３次元的に計測し、一般的な顔（かならずしも美しい顔ではなく）と比較する事が我々の臨床の一部門となっています。

⑤　歯科補綴学Ⅱ講座（長岡英一）

義歯と顔：歯がなくなると顔の下半分が短くなったり、口唇が落ち込んで、顔つきが変わる。この顔つきは義歯の使用によって歯があったときのように回復されるが、その回復程度あるいは老化による皺や溝の状態は義歯の出来具合に左右される。また、義歯の出来具合は、義歯患者の気分あるいは心理状態に影響し、ひいてはその時々の気分が創出する一過性の表情皺およびその積み重ねが形成する恒久的な容貌皺に影響する。

⑥　歯科基礎科学（梶原和美）

臨床心理学の観点から、手術によって顔が変わる患者さんたちの体験がどのようなものであるかを調査しています。顎変形症の患者さんたちは、子供のころから自分の顔に違和感を抱き続け、ついには時間も努力も相当に必要な外科的矯正治療を決断します。彼らの「顔」体験はどのように構成されてきたのでしょうか？彼らに特有な心理的特徴といったものはあるのでしょうか？彼らの体験を検討していく中で、私たちの「自分の顔とのつきあい方」を捉え直してみたいと考えています。

最後に、本会では広く学内、学外より顔について関心、興味を持っている方々であればどなたでも歓迎いたしますので会員までご一報いただければ幸いです。

保　健

結　核　－その実情について－

保健管理センター所長　　前　田　芳　夫

最近、結核が、再び注目を集めています。それは、これまで減少を続けてきた我が国の結核の新規発生患者数が、平成９年を期して、増加に転じ、以後、増加していく様相を呈しているからです。そして、厚生省も、これらの事態を踏まえて、平成11年７月に、「結核緊急事態宣言」を発しました。多くの人々が「結核は、もう過去の病気だ」と思い込んでいましたから、これは大変な衝撃となりました。

我が国では、かつて、若者の死因の第１位は「結核と戦死」と言われ、結核は不治の病として、人々から大変恐れられてきました。結核を病んでいると聞いただけで、人々は、その周囲から、遠ざかっていきました。それは、結核の病原体である結核菌が、抵抗性の強い、また、感染性の強い菌で、しかも、飛沫感染することから、この恐ろしい病気から身を守るためには、感染源から遠ざかる以外に、方法がなかったからです。結核は病巣が、主として肺であることから、結核患者は、病状が進むにつれて、咳嗽や喀痰、血痰、発熱等に悩され、衰弱していきます。そればかりではありません。周囲の人々をも、次々に結核に感染させていくのです。特効薬がなく、また、劣悪な食糧事情下にあった当時としては、絶望的とも言える病気でありました。

しかし、戦後は食糧事情が好転し、また、医学等の進歩により、結核の患者数は激減しました。さしもの結核も克服されたかにみえ、人々の結核への危機感も薄らいできておりました。そこへ「結核緊急事態宣言」です。どの大学も、どの医療機関も、今や「ツベルクリン反応検査だ」、「定期健康診断の受診徹底だ」と、その対応に大わらわとなっています。しかし、本学では、この間も、学生の結核患者が絶えることはありませんでした。平均して、毎年１～２名ですが、新規発生の結核患者がみられました。しかし、彼等は結核患者ではありましたが、その喀痰に結核菌が認められるような、強い感染力を持った結核患者、すなわち、排菌陽性者ではなく、全員が感染力の弱い排菌陰性者でした。ところが、数年前から、この新規発生の結核患者に、排菌陽性者がみられるようになりました。排菌陽性者の出現は、本学では、保健管理センター開設以来のことです（昭和48年開設）。しかし、このような現象は、何も本学に限ったことではありません。数年前から、全国の大学保健管理センター学会でも、排菌陽性者の報告例が散見されはじめており、大学においても、結核再興の危険性があることを窺わせています。

結核は紀元前から、人類を苦しめてきた恐ろしい病気です。飽食時代と言われ、特効薬が次々と発見されていくなかで、結核は、再び蔓延する様相を呈しています。結核を克服するには、何よりも先ず、定期健康診断を受けて、早期発見に努めなければなりません。発見が遅れては、病状が悪化するばかりでなく、周囲の人々をも結核に巻き込んでいきます。排菌陽性者は、大学では、定期健康診断未受診者に多くみられています。

定期健康診断は必ず受けるようにして下さい。

留学生から見たグローバリゼーション

鹿児島大学大学院人文社会科学経済社会システム　　ノルミザン・バカル

グローバリゼーションとは何か？この問いには簡単に答えられないだろう。メディアがグローバル的な自由と宣告されているような自由と関連されたら正答は複雑になりかねない。それでは、グローバル的な自由とは何か？自由経済、自由な情報交換、またさまざまな自由と追求される世界社会からの側面を想定しなければならない。経済の側面ではグローバル経済とは「さまざまな経済主体の効率性の追求が全地球規模で行われるようになる事」と定義できる。では、グローバル化の意味を鹿児島大学の世界から探ってみましょう。　鹿児島大学への留学生の入学は文部省の積極的な国内大学の席を提供する事により増加してきたのだ。それより学識の共存が重要な要因であろう。グローバル的な学識共存は全世界の初等教育が共通されているため繁栄したと考えられる。国際的な学識共存は直接的にも間接的にも外交関係を促進する要素である。直接的には共同研究などが行われたり新技術の開発会議などが生まれたりして国際的な民間活動団体の活動範囲にいたるまでの専門知識協力が設立されるようになるだろう。間接的にはその活動に参加する人間が個人的な交際で生まれた理解、感情に伴って異文化などの偏見が相殺されるだろう。

僕が鹿児島にいる初期の頃には食事が大問題だった。宗教上と味の理由から毎日のメニューが限られた。その上、何より気候と言葉になかなかなじめなかった。日本の異なった文化や習慣に慣れることによって日本人との付き合いも広くなった。要するに今まで疑問にしていた日本人の意味を解明できた。日本文化の異なる点を探っていく間にマレーシアとの共通点も発見した。その間異文化の意識も無くなり日本人の友人と同じ感情を感じることができるようになった。学識を学ぶためにやってきた僕は一歩進んでグローバリゼーションの意味が身近にあると感じてきた。

留学する理由

理工学部海洋土木学科　　ミエン・トウエー

MYINT HTWE

私は日本へ1999年５月に来て1999年８月に行われた大学院の入学試験前に材料機能学、材料力学、応用数学、土質力学と水理学を勉強しました。入学試験に合格した後は、地震防災工学、地盤防災工学、コンクリート構造設計学、構造解析、海岸工学、土質工学と水理工学の授業を受けて勉強しています。大学院の修士課程に必要なFORTRANプログラムも勉強しています。

私たちのミャンマーでは巨大な構造物や橋梁はあまりありませんがこれからはミャンマーでも巨大な構造物や橋梁を建設する必要があると考えられます。また海洋構造物を建設する時、振動工学は非常に大事です。国際的な仕事をする場合、動的な問題を扱う振動工学は非常に重要と考えます。このため私は日本へ留学しに来ました。また修士課程を修了したら、博士課程に進学して、さらに地震工学や海洋構造物について研究したいと考えています。

構造物は社会の基盤をなすものであり、その安全性について検討しておくことは非常に重要なことであると考えられる。私は構造物の設計や解析法について学びたいと考えて、日本で勉強することにしました。日本のように地震の多い国では、地震力を考えた構造物の設計が重要になる。1995年の神戸の地震に見られるように、日本ではこれまで地震による大きな被害を受けてきたが、その経験から新しい設計法の開発が行われてきた。

これまで構造解析についてはミャンマーで深く学ぶ機会がなかったので、動的解析に関する勉強に取り組みたいと考えている。

大学院の修士課程では構造解析や地震応答解析に関する勉強に取り組みたいと考えている。構造物の設計に必要な地盤工学や材料力学及び流体力学等についても勉強したいと考えている。そして修士論文では橋梁構造物の地震応答解析について研究したいと考えている。

固体電子論グループ

理学部物理科学科　　石　田　尚　治

身の回りの物質の電気伝導性に注目すると、電気を通すもの、絶縁体、低温では電気を通さないが高温では通す半導体や、抵抗がない超伝導体がある。また、鉄は磁石にくっつくが、銅やアルミニウムは単体では磁石にくっつかない。しかし、くっつかない原子を混ぜて合金にすると、磁石にくっつくようになる物もある。更に、形状記憶合金のように変形したものが温度を変えると元の形に戻る物もある。このような性質のメカニズムはオングストロームの世界での電子の振る舞いを調べると解明できることが多い。

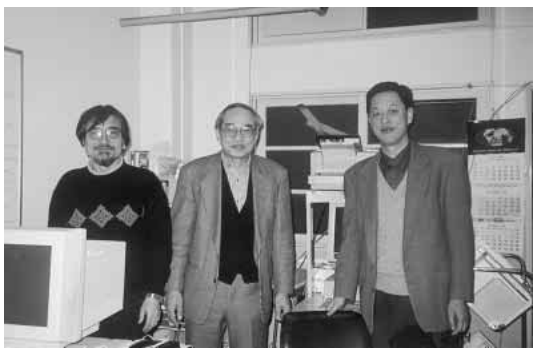
我々、固体電子論グループ（藤井伸平、永吉秀夫、石田尚治）は電子計算機を使って微分方程式を解き、結晶中の電子のエネルギーや波動関数を計算して得られる電子構造を基に、いろいろな金属、合金、化合物およびその表面や薄膜の結晶学的、磁気的、電気的性質などを理論的に予測している。以下に、２，３のホットな研究課題について述べる。

電子は負の電荷と共に上向き、下向きスピン磁気モーメントを担っている。即ち、上向きか下向きの磁石である。それ故、上向き、下向きスピンが同数でない原子や物質は磁石になる。最近、スピン分極を利用した「スピンエレクトロニクス」と言う新たな分野が開拓されようとしている。従来のデバイスは電荷を利用したもので、電流はスピン分極していない。もし完全にスピン分極した（例えば、上向きスピンの電子だけが流れる）電流が得られたら、これまでの物とはまったく異なる機能を持つデバイスを作製でき、広い分野での応用が期待できる。このことを可能にするハーフメタリック（完全にスピン分極した電流が流れる）化合物が発見され，新たな機能材料として注目されている。このような化合物は数少ないが、われわれは電子構造を基に数多く予測している。

また、形状記憶合金の記憶性は温度変化に伴う結晶構造の転移に起因しているが，これらの中にスピン分極した興味ある物質（Ni、Mn、Gaの３元合金）が発見されている。構成原子の組成を変えると、形状回復を温度以外にスピン分極を利用して外部磁場でも制御できる化合物を作製できる可能性がある。これらの電子構造を計算するとその性質が理論的に予測でき，実用化に向けての問題解決の手助けになる。

薄膜や少数原子の塊は三次元的大きさを持つバルクの性質とは全く異なる物性を示すことがある。このような表面電子構造研究のための方法論を確立し、半導体表面として最も代表的なSi(111)表面での原子配列と電子構造との関連を調べ、共有結合論から安定構造として期待される再構成構造や、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ族原子のSi(111)表面への吸着構造を取り上げ、原子種ごとの最安定吸着構造を明らかにしている。

上記のように、物質は構成原子及びその組成、原子配列、形状、温度、圧力などにより多彩な性質を示す。我々は物質の性質の基礎的な研究と共に、応用に役立つ機能性にも注目して研究している。



サークル紹介

鹿児島大学学友会華道部

（草月流）

法文学部　3年　濱　田　　薫

生活様式・考え方などが欧米の影響を受けて伝統的な日本文化というものが、どこか一歩引いたところから見られてしまっているような時代です。特に若い人は「華道部」というと「着物を着て花を活けるの？」などとイメージだけが先行しているようですが、野の花でも十分花材となる実に身近なものです。

もともと男性がその中心となっていた伝統文化。もちろん現在男性部員もおり、女性よりもかえって慎重に活けると言われる程です。週一回、草月流師範の長島チエ子先生が、まず部員が自分なりに活けたお花を更に「お花らしく」なるように丁寧に指導してくださいます。

草月流は基本型はありますが、応用の仕方は際限なくあり、型にはまらない大担な作品も多く、オブジェなどを通して非常に現代的な感覚も投影されて、日本文化を継承しつつ、未来への広がりを持つ魅力的な作品に出会うことができます。私たちも春と秋に華展を開き、季節の花材を作品にし、特に秋の大学祭での華展では石や竹、無機物などを使って部員が協力してオブジェを合作しています。華道を通して豊かな心が養われ、社会に出てからもその心はきっと人間の幅を広げる要素の一つとなると思います。

多くの人が日常生活の中にある花に目を留めて華道を身近な存在に思えるような、素敵なお花を活けられる。そんなことを考えつつ、楽しくお花に触れていきたいと思っております。

平成11年大学祭のオブジェ作品

鹿児島大学学友会馬術部

法文学部　3年　簡　　昌　巳

鹿児島大学馬術部は、昭和14年（1939年）、旧鹿児島高等農林学校時代に創部され昨年60周年を迎えました。鹿児島の雄大な自然のもと、歴代の諸先輩が、強い馬作り、人作りに情熱を注ぎ込みながら歴史を積み上げ、現在に至ります。

ここ数年間は、毎年全日本学生賞典馬術競技会に連続して参加し、関東の強豪私立大のひしめきあう中、数少ない国立大学の雄として上位を占めております。

馬術は生き物を相手とする唯一のスポーツで、連日早朝から練習や作業に追われますが、それだけに試合で手塩にかけた馬と共に好成績を収めたり、全国の馬術部員と交流を持てたりすることはかけがえの無い財産になります。

馬術部に入ったことで、今まで馬など触ったこともなく遠い存在であったのに、今では片時も忘れえぬ存在となりました。

是非一度、厩舎へ見学にいらして下さい。部員一同お待ちしております。

平成11年12月５日
第49回九州地区大学体育大会馬術競技
（於：川辺町森林馬事公苑）

新任教官紹介

平成11年７月１日から平成11年11月30日までの間に就任された教官（講師以上）は次のとおりです。

ドレーヴス　アンゲラ（法文・助教授・法政策）
修士（文学）

（生）昭和39年11月10日
（学）ミュンヘン大学文学部
（前）新潟大学法学部助教授
（担）法交渉

鹿児島は気候も人々もとても良い所ですので、楽しく授業や研究に励みます。

桑原（くわばら）　司（つかさ）　（法文・講師・経済情報）
修士（文学）

（生）昭和45年１月21日
（学）東北大学大学院文学研究科博士課程前期
（前）なし
（担）情報社会論

初心を忘れることなく、研究・教育に従事する所存です。

上村（かんむら）　裕一（ゆういち）　（医・教授・医）
博士（医学）

（生）昭和30年10月21日
（学）九州大学大学院医学研究科博士課程
（前）九州大学医学部附属病院助教授
（担）麻酔・蘇生学講座

安全な麻酔・周術期医療が大学のみならず地域でも行える体制を確立するために、教育・研究・臨床に努力いたします。

中川（なかがわ）　昌之（まさゆき）　（医・教授・医）
博士（医学）

（生）昭和30年７月21日
（学）大分医科大学大学院医学研究科博士課程
（前）大分医科大学医学部助教授
（担）泌尿器科学講座

泌尿器科学分野における先進医療と地域医療の発展、充実と教育、研究に微力を尽したいと存じます。

竹内（たけうち）　亨（とおる）　（医・教授・医）
博士（医学）

（生）昭和30年３月９日
（学）山口大学医学部医学科
（前）大阪大学大学院医学系研究科助教授
（担）衛生学講座

高齢化社会を向かえ予防医学は重要な社会分野となります。その基礎の確立、実践並びに人材の育成をしたいと考えております。

みなごえ　しんいち
皆越　眞一　（医・助教授・医）
博士（医学）

（生）昭和24年３月１日
（学）鹿児島大学医学部医学科
（前）南風病院循環器部長
（担）内科学第一講座

周りの研究者との接点を探り、自らもメッセージを発信できるようベストを尽くしたく思っております。宜しくお願い申し上げます。

むらやま　つぎや
村山　次哉（医・附属難治性ウイルス疾患研究センター助教授）
博士（医学）

（生）昭和26年６月30日
（学）日本大学農獣医学部畜産学科
（前）金沢医科大学医学部助教授
（担）ウイルス免疫学
（臓器がんウイルス研究分野）

30年ぶりの故郷で、雄大で活発な桜島のように、いつもベストを尽して頑張りたいと思います。

よしはら　としひろ
吉原　俊博　（歯学部附属病院・講師）
博士（歯学）

（生）昭和35年３月23日
（学）北海道大学大学院歯学研究科博士課程
（前）北海道大学歯学部助手
（担）小児歯科学、小児歯科学実習

教育・研究・診療の３つをどこまでバランスよく進めることができるかを実践してみようと考えています。

てらだ　のりお
寺田　教男　（工・助教授・電気電子工）
博士（工学）

（生）昭和32年11月24日
（学）東京工業大学大学院理工学研究科博士後期課程
（前）通商産業省工業技術院電子技術総合研究所材料科学部・主任研究官
（担）固体電子工学、光エレクトロニクス

超伝導体等の形成と電子状態を研究してきました。周囲の皆様との交流を通じ、より広い領域で研究・教育を行いたいと考えています。

イ　ジェヒョン
李　哉泫　（農・講師・生物生産）
修士（農学）

（生）昭和40年５月15日
（学）東京大学大学院農学系研究科修士課程
（前）東京大学助手大学院農学生命科学研究科
（担）農業経営経済学概論、農業経営学、農業経営学特論Ⅰ・Ⅱ

来日10年目の初赴任地である鹿児島大学で、2000年を迎えることになりました。よいスタートになるよう覚悟を改めております。

ふくとく　やすお
福　康雄（アイソトープ総合センター助教授）
博士（農学）

（生）昭和26年12月９日
（学）九州大学大学院農学研究科博士課程
（前）佐賀大学農学部講師
（担）

新設のアイソトープ総合センターにはまだ建屋がありません。時節がら、建屋新築には困難が予想されますが、精一杯頑張ります。

図書館だより

創立50周年記念「薩摩の文化遺産　玉里文庫展」を開催しました

附属図書館では鹿児島大学創立50周年記念協賛事業の一環として平成11年11月４日（木）から10日（水）まで中央図書館５階AVホール及び貴重図書館閲覧室において「薩摩の文化遺産　玉里文庫展」を開催し、所蔵する貴重な郷土の文化遺産である「玉里文庫」を初めて公開した。玉里文庫は薩摩二十八代藩主島津斉彬の弟、島津久光の収集した和書及び漢籍、文書など一万八千九百余冊の貴重書からなっており、今回の展示は島津家相伝の古文書、日本史学、有職故実の学、源氏物語、洋学、博物学、名所図会、漢学など様々な点から玉里文庫の特色をあらわす38点を展示した。また、展示会開催にあわせて11月６日（土）に中山右尚教育学部教授による「玉里文庫の諸相－洋学から江戸文化まで－」、11月７日（日）に原口泉法文学部教授による「玉里文庫にみる大名文化と島津久光」と題する講演会も開催され盛況であった。

展示会に関するアンケートには「今後も展示会等をしてほしい」、「もっと多くの資料をCD-ROMで見られるようにして欲しい」、「早くインターネット上で公開して欲しい」などの意見が多く寄せられ、開催期間中は学内外から500名ほどが訪れ好評のうちに終了した。

BBC、CNN放送について

附属図書館では英語学習システムとして平成11年11月からBBC（ロンドン発のドキュメンタリー＆ワールドニュース）とCNN（24時間放映のワールドニュースネットワーク）の国際衛星放送が１階CSコーナーで視聴できるようになりましたのでご利用ください。

問い合わせ先
附属図書館情報サービス課
資料サービス係
（内線7435・7436）

■編集後記

特集のテーマを、記念すべき西暦2000年（平成12年）にちなんで「2000年の門出」としてみました。

卒業する学生や院生の文章には新しい飛躍と飛翔への確かな手応えが伝わってきます。退官される方々からは一仕事終えた満足感とさらなる将来への期待感が伝わってくるようであります。2000年という節目の年の旅立ちであり、いつもとはひと味違う素敵な展望が開けてくるような気がいたします。

加えて、本年度は鹿児島大学創立50周年のおめでたい節目の年にも当たりましたが、その記念式典における田中弘允学長式辞を全文掲載いたしました。本文は50周年に当たっての心引き締まる訓辞である一方、旅立つ方々にとっては心豊かなメッセージになるに違いありません。

このほかにも、内容豊かな原稿をお寄せいただいた皆様に深甚の敬意を表します。また、引き続き表紙のデザインをお引き受けいただきました教育学部の梅田晴郎教授、事務担当の庶務課原本邦廣専門員、並びに企画その他全般についてご協力いただいた広報委員の先生方に心から感謝申し上げます。

（歯学部教授　北野元生）

本誌に関するご意見・ご感想を下記までお知らせください。

電話　099‐285‐7025
FAX　099‐285‐7034

■広報委員会委員

上田耕平（委員長・評議会）
北野元生（評議会）
古川一男（補導協議会）
林　国興（共通教育委員会）
上村浩明（法文）　池川　直（教育）
根建心具（理）　榮鶴義人（医）
島田和幸（歯）　宮崎智行（工）
田代正一（農）　安藤清一（水産）
吉田義弘（医）

●鹿大広報　第152号
平成12年２月20日発行
●編集・発行
鹿児島大学広報委員会
住所：〒890‐8580
鹿児島市郡元１丁目21番24号
電話：099‐285‐7025
FAX：099‐285‐7034
印刷：斯文堂㈱